

Discussion: 01

Dressing Is A Way Of Life

底力が見えない服。

Text_Kaori Nakano



Olof Anders Peterson/Corbis/Amnimages

テラードスーツは、抽象的に男性の身体を包み込み、生々しさを隠しながら着る人の情報を伝える、一種の男性服の完成形です。基本構造は変化しないのに、時代や社会に応じてその表現やあり方を変え続けています。

終戦後から1950年代にかけて主流だったのは、グレイフランネルのスーツ。グレゴリー・ベック主演の映画「グレイフランネルのスーツを着た男」(1956)が描くように、グレイスーツは、アメリカでは将来有望なビジネスマンの象徴でした。日本においても、多くの男性が着たのはグレイの背広。「どぶねずみルック」とも呼ばれたスーツは、堅実な社会人の制服でもありました。

60年代には、アイビールックが誕生、日本では本家も一目置く独自の発展をします。さまざまな“ルール”が男性のマニア心をくすぐり、多くの日本の男性をして、お洒落をするという喜びに目覚めさせることになりました。アイビーへの対抗路線として、パリのピエール・カルダンによるスーツを筆頭に、“コンチネンタル”ルックも仕掛けられます。サヴィル・ロー靴のブリティッシュ

・ルックやカーナビ・ストリートのモズルックも人気を博し、スーツスタイルの選択肢が増えるとともに、TPOに応じてスーツを着着けるというライフスタイルも広がります。

60年代から70年代にかけては男性が華やかに装うビーコック革命が登場します。日本では、経済の低迷を経て79年に半袖の省エネルギーが提案されます。仕事着としてのスーツを快適にするためならば形を変えていいという発想で行われた改革の試みは虚しく、逆に、歴史と美学に裏打ちされたスーツの基本構造の強さを証明した結果に終わりました。

1980年代は、ジョルジオ・アルマーニが芯地やパッドを省略したスーツを世に出します。日本でも、アルマーニの影響を受けたソフトスーツが流行し、いわゆるDCブランドが氾濫。スーツを着ることを通して男性が官能的な喜びを感じ、セクシーさをアピールすることができるようになったのは、画期的なことでした。

そして21世紀に入り、エディ・スリマンがミニマ

ルな細身のスーツを作ります。従来、男性にながしかの“威厳”を与えるものであったはずのスーツが、草食系男子増殖という時代の趨勢と手を携えて、男性をより、“小さく”、“繊細”に見せる服としても機能します。

かくして、スーツが飽和状態となった反動もあり、カジュアル化が進み、アメリカの若い富豪はスーツを着ないことでその富や力を誇示するまでになりました。

スーツを着ない、という選択肢も含めて、パリエーションと自由が広がりをすぎた混沌が広がる現在、あえて日常着としてスーツを着るという姿勢が、エッジの効いたファッションステイトメントとして注目を浴びています。50歳を超えてストリートファッションのスターになった髪型と顔のファッションコンサルタント、ニック・ウースターは顕著なアイコンだと思いますが、トルコのファッションデザイナー、ウミット・ベナンや、映画監督のウェス・アンダーソンなど、肩の力を抜いて日常的にスーツを着る男性たちのスタイルが、絶大な支持を受けています。

アフリカ・コンゴ共和国のサブールもそうでしょう。彼らは貧しい街のなかを、フル装備のカラフルなスーツでねり歩きますが、混沌する状況においてあえてスーツできちんと装う「サブ」[サブ]としてのあり方を、「修練であり、生活様式であり、人生の選択」として位置付けています。雑ばくな風情の中に、悪意ある自由なテラードスタイルで異彩を放つスーツメンズを見ていると、イヴ・サンローランの“Dressing is a way of life” (装いは、生き方)という言葉を思い出します。

ドレス(dress)という英語は、動詞として使われると、衣服を着せるとか、整頓する、隊列を整える、などの意味がありますが、語源をたどっていくと、古いフランス語の“drecler”に行きあたります。この語には、自分自身を重く立たせる、關いに向かって立ち上がり、備えをする、という意味もあります。

ともすると、弱きに倒されそうになる世界のなかで、自身を重く立たせて世界に対峙するために、テラードスーツで誰と着飾る。男性が秘めるあらゆる可能性を表現できる底力を持つ服だからこそ、一筋縄ではいかないその人のあり方も信入るのだと思います。